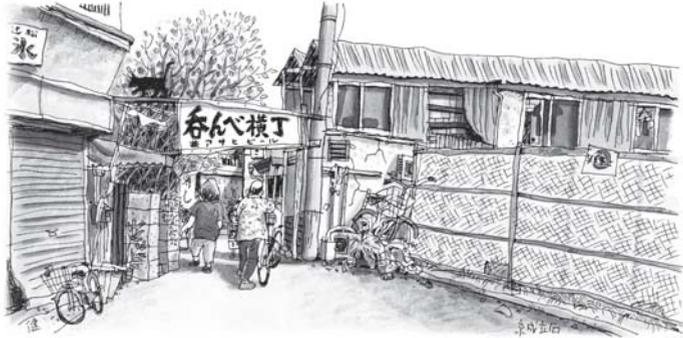


株式会社双葉 創業70周年プロジェクト

ぶらり 街歩き

まちづくりを考えながら、
まちの今と昔を歩いてみた。



Keisei Tateishi

都市計画総合コンサルタント
株式会社 双葉

まえがき

まちに暮らしていても、「まち」を意識することはほとんどない。しかし、夕暮れ時のちょっとした瞬間や駅のホーム上であたりを眺めた時、ふとまちを感じることもある。まちとは不思議な空間だ。

今回、70周年プロジェクトで「ふらり街歩き」を編集するにあたり、まちへの思いを社員が随筆風に綴ることとした。「まち」を書くことで、能動的にまちを意識し表現しようというわけだ。

横丁や路地にひそむ息遣いや掛け声、匂いや少しのいかかわしさを、その場にほろ酔いで立ち止まったような思いにさせる場面がある。

行ったこともないまちなかの本屋に紛れ込んだような錯覚におちいる。

マニアックな人しか知らないまちの自慢やヒストリーが、その寓話を軒先で聞いているような、仕事先の遠いまちでの思いや感動があたかも既視感のようにすつと入ってくる。

子供の声や、バス停や店先での会話が聞こえてくる無機質で美しいまちのそばに人間らしい営みや野良猫が歩いていたりする。

まちを語るとき、「見る」「触れる」「嗅ぐ」「聞く」「味わう」五感のほかに、まちを感じる思いがそれぞれに表れて、楽しく、思わず頷きたくなる小冊子になったのではないかと自画自賛している。

私たちは、まちづくりのコンサルタントなので計画的な「まち」を考えることが多い。ともすれば計画論や制度が先行しがちだ。この小冊子を読むと、本当はまちを感じ、まちの思いをどれだけ表現できるかがとても大切だと思えてくる。

感じ方は一人ひとり異なっているけど、どこかで共通するキーワードがある。それが見つかれば、お互いの感じたことが新しいネットワークのように有機的に広がっていく。

この広がりやを少しでも形として表現し、そこに暮らす人や仕事をする人と一緒に次世代に紡ぎ続けられるまちを模索していきたい。猛スピードで変化する社会にあっても、しっかりと「まち」を感じ、それを表現する力を少しでも持ち続けたい。そんな思いを、ぜひ手に取って、ページをめくって、挿絵とあわせてまるごと感じていただきたい。



ぶらり 街歩き

CONTENTS

- まえがき 2
- 人はなぜ谷中へ吸い寄せられるのか 谷中銀座 4
- 「昭和駅前遺産」に登録したいまち 京成立石 6
- 僕の「街の本屋さん」 埼玉・行田 10
- 銀座にひっそり残る昭和の気配 銀座 三原橋横丁 12
- 東京今昔がギュッと詰まった路地 大井町・東小路 14
- 大島四丁目団地 変わるもの、変わらないものほか 16
- 東武沿線に輝く孤高のまち 板橋・常盤台住宅 20
- 遠い記憶をたぐりよせる匂い 川越・菓子屋横丁 22
- 代官山 坂の上のTOKYOほか 24
- 「まちおこし」ならぬ「まちのこし」 白杵・二王座 28
- 唐揚げにビール 北千住・タカラ湯 30
- 裏通りに欠かせなかった店 大宮・さくら小路 32
- 鉄道と人の心を支える高架下 有楽町高架下 34
- 杜の都・仙台は「横丁率」も高い 仙台・文化横丁 36
- 雨もまた風情あり京の石畳 京都・石堀小路 38
- 屋台が醸し出す路地裏気分 博多・春吉橋 40
- 大人に目覚めるまち、蕨 埼玉・蕨駅周辺 42
- 「新世界」の羨ましき人びと 大阪・ジャンジャン横丁 44
- 湯煙の彼方に見える歴史 箱根・塔ノ沢温泉 46
- みちのくの夜寒を温める人情通り 八戸・たぬき小路 48
- 目白リバーサイドウォーキング 目白駅界隈 50
- 信玄がつくった理想郷 甲府 54
- 浪速の心意気を守る路地 大阪・法善寺横丁 58
- 校門を抜けるとテレビ局だった 神田駿河台 60
- ここのとり伝説と田んぼのあるまち 埼玉・鴻巣市 62
- 時計が止まった路地 溝の口駅西口商店街 64
- 最北端のレトロな横丁 稚内・波止場横丁 68
- 編集後記 70

人はなぜ谷中へ吸い寄せられるのか

——谷中銀座

日暮里駅から西へ歩いていくと、途中から道が二股に分かれて下り坂が出てきます。まっすぐ進むと谷中銀座。左へ曲がると墓地に沿った七面坂。

このふたつの坂を下った先からは、それぞれどんな音が聞こえてくるのでしょうか。安藤鶴夫の小説『巷談本牧亭』に次のようなくだりがあります。谷中銀座は「始終、ちんどんやが音を立てていて、生きていることを大きな声でみんなにどなっている」。一方の七面坂では「たいてい、どこかで木鐘を叩いて、勤行の音がしている」。

谷中には大きな墓地があり寺町でもあります。下町の賑わいの外側に寺町の静けさが控えているのがまちの特徴のひとつと言えるでしょう。訪れる人は、路地の軒先の小さな自然や神出鬼没にあらわれる猫たちを眺めているうちに、「情緒」や「風情」といった言葉

を頭に浮かべるかもしれません。

それにしても、これらまちの魅力を表す言葉の使い方は思いのほか難しいものです。人はなぜ谷中に吸い寄せられるのか。その問いに付き合うためにも実際に足を運んでみることをお勧めします。この小さなまちは何かヒントをくれるかもしれません。例えば、これからのまちづくりについて、など。

ちなみに『巷談本牧亭』が新聞に連載されたのは昭和37年で、約半世紀も前のこと。かつての東京の一風物として登場する谷中のまちですが、そこに描かれた姿と現在の姿から受ける印象の間には不思議と大きな隔たりを感じません。昔と今をつなぐ一本の芯が、時代の移り変わりを縫いながらもしっかりと通っているのでしょうか。そして、このまちの魅力的なこまやかさもまたそこに由来するのであれば、それは本来すべての暮らしの場が備えていたはずの性格だったのではと、私たちに思い出させてもくれるのです。（石川巧）



谷中銀座と交差する谷中三丁目の商店街

東武沿線に輝く孤高のまち

板橋・常盤台住宅

「あら、感じのいい所ね」「道のつくり方が面白いわ」「この沿線にもこんな素敵な住宅地があったんだ」。新婚時代、近所を散歩しながら、そう妻がつぶやいた。幅8m程度なのに中央分離帯があり、そこに並木が続く道路「プロムナード」。真ん中に丸い緑地の車返しがある行き止まり道路「クルドサック」。随所にこんなまちづくりの仕掛けがあるのが、池袋駅から5つ目のときわ台駅で、その北口を少し歩くと、東武さんには失礼だが東上線沿いにもこんなつくり方をしたまちがあるのかと感心してしまう住宅地だ。

昭和初期の有名な田園調布開発からは10年後らしいが、東武鉄道が直接手がけ、大きさに言えば日本の郊外住宅地開発史に残る常盤台住宅地である。クルドサックやプロムナードは今に残る特徴だ。

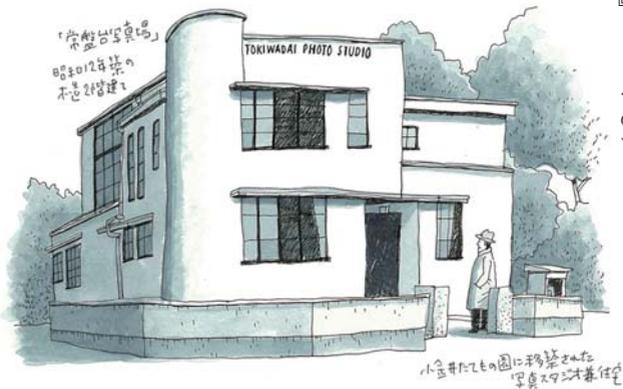
私は東京の南西方面で家賃10万円、2DK、RC造、会社へ30分の立地で新生活生活スタートのまちを探していた。中央線や小田急線、京王・井の頭線では見つからず、



西武新宿線・池袋線へ北上、ついには東武東上線へ。諦めかけていた時、ありました。希望の物件が。同じ方面の沿線より東上線沿線は家賃相場が安いイメージだったが、こんな高級感漂う住宅地近くの南常盤台で見つかったのである。実はこの住宅地のこと、建築の学生時代に都市計画の授業で少しだけ知っていた。イギリス人のハワードが20世紀初頭に著した理想都市論『明日の田園都市』と、そのアメリカ版としての近隣住区論と実践版であるニュージャージー州のラドバイン開発。ここでは歩車分離の都市構造を目指してクルドサック道路を取り囲む広い敷地の住宅

群がつくられた。その流れをくんだ住宅地開発が常盤台にもあったこと。専門誌によると、当時の内務省官房都市計画課の技術掛に配属間もない23歳の技術者が、現地も見ずに設計した案が採用されたとか。無名の1技術者の設計提案が実現したのは驚きで、まちづくりに関わる技術者としては実にうらやましい話だ。

さて、常盤台で生まれた息子も成人し、あつという間に四半世紀が過ぎた。そうだ、近いうちに家族で懐かしの常盤台へ散歩に出掛けてみるとするか。(和田秀司)



「まちおこし」ならぬ「まちのこし」

——白杵・二王座

前夜の雨で、屋敷のしつこいと板壁をにぶく映す石畳の坂道を歩いていると、背後に人の気配。さては家老派が差し向けた刺客か……。てなことはないけれど、そんな妄想を巡らしたくなるほどひっそりとして古風な一画です。

ここは豊後水道を挟んで四国と向き合う九州の小さな城下町、白杵市^{うすき}。貴重な江戸初期のまちなみがそっくり残され、国交省の「都市景観100選」にも選ばれた「二王座歴史の道」です。人口減少が加速するなか、多くの自治体はまちおこしを狙い、ゆるキャラやB級グルメの開発に血道を上げますが、白杵が目指すのは「まちのこし」。何世紀にもわたり地域が育んできた景観や文化資産を改めて見つめ直し、ほかにない活性化を目指しているんだとか。

それがまちの経済をどれほど支えられるかはともかく、イモの子を洗うような混雑ぶりの有名観光地より旅行者にはずっと魅力的。小さなまちの賢い選択に思えます。日本中のまちが京都や金沢になれるはずもなく、コンパクトで落ち着いた暮らしで生き残りを追求すべきまちが大半なわけですから。皆と同じを目指さない白杵に、乾杯。



創業400余年、風情あるみそ・しょうゆの店「カニ醤油」



徳

白杵・二王座

